

金田 真聡のドイツ・ベルリン建築通信 no.07

ベルリン・オリンピックスタジアム(*1)

ブンデスリーガとシュタディオン

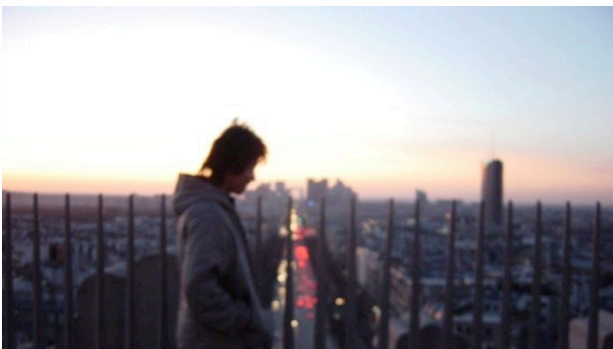
ブンデスリーガ開幕戦。5万人以上の大観衆が、選手の一つ一つのプレーに喜怒哀楽し、ボールの行く末に息を飲む。そしてその時の光景は、やがてあの頃の思いへとつながっていった。

ヨーロッパサッカーとの出会い

私が、人生で2つ好きなものを挙げるとすると、それは間違いなく建築とサッカーだ。つまりスタジアムへサッカー観戦に行くということは、試合とスタジアム建築の両方を堪能できる、私にとって夢のようなイベントなのだ。小学校から高校まで熱心なバスケット少年だった私が、とりわけヨーロッパサッカーに夢中になったのは、高校2年生の頃である。小学校以来のバスケット仲間の家に遊びに行った時、机の上に海外サッカーの雑誌が置いてあった。何気なくそれを手にとった私に、彼はこう言った。

「サッカーも、おもしろいで」

それ以降、ヨーロッパサッカーに興味を持った私は、自他ともに認めるサッカー好きになった。学生時代にヨーロッパを巡った建築旅行でも、英語がまったく話せないにも関わらず、何故かサッカーのことだけはコミュニケーションが図れるのだ。小さい街でも地元選手を知っていたおかげで、現地の人と打ち解けられたことは一度や二度ではない。私にとってサッカーはまた建築旅行のパートナーのようなものでもあった。



建築とサッカーを見て回った欧州旅行

ブンデスリーガ観戦ツアー

そんな私にサッカーの魅力を教えた張本人が、先頃なんとドイツに来た。しかも新婚旅行で。小学校以来の友人としては感慨深いものがある。セレッソ大阪の本拠地、長居スタジアムにほど近い大阪住吉区に住む彼らは、ホームゲームの度に自転車でスタジアムに行き、熱心に応援するサポーターだ。お互い相変わらずだ。

彼らの新婚旅行の目的は、やはりドイツ・ブンデスリーガを見ることであった。そこでまず私は、彼らと地元ベルリンで行われるブンデスリーガ開幕戦を観戦しに行くことにした。対戦カードはヘルタ・ベルリン対アイントラハト・フランクフルト。ヘルタ・ベルリンは、昨年ブンデスリーガ2部を史上最速で優勝し、1部に返り咲いたため地元は大いに盛り上がっている。そして今年から日本代表の細貝萌選手も加入した。ドイツに来る以前は、明け方に眠い目をこすり、時差と戦いながらヨーロッパサッカーを見続けてきた私にとって、ヨーロッパに地元チームができ、さらにそこで日本人選手がプレーしているということに興奮せずにはいられない。何万人もの大観衆が熱い声援を送る中、たった一人の日本人選手としてピッチで戦う姿は、言葉も習慣も異なる外国人と働いている自分を、いつも励ましてくれる。これは絶対に応援しなくてはいけない。

約20時間のロングフライトの末、ベルリンにたどり着いた友人夫婦を空港で迎え、すぐさま向かった先は、ベルリン・オリンピックスタジアム (Berlin Olympiastadion)。ベルリン到着後たった3時間にも関わらず、疲れたそぶり一つ見せず、ハイテンションでスタジアムに向かう彼らを、サッカー

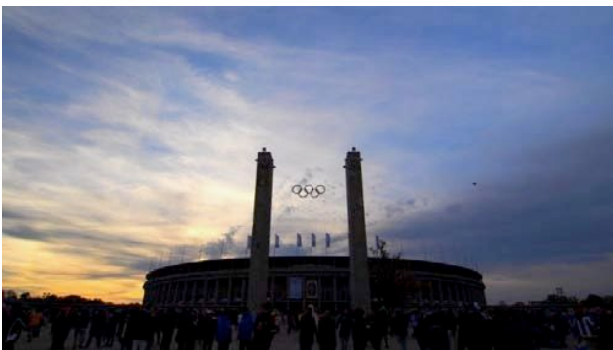
一好きと言わずしてなんと言おう。そんな私たちを出迎えたのは、古代のコロッセオを彷彿とさせる、圧倒的な迫力を持つスタジアムであった。



ベルリン・オリンピックシュタディオン(外観)

ベルリン・オリンピックシュタディオン

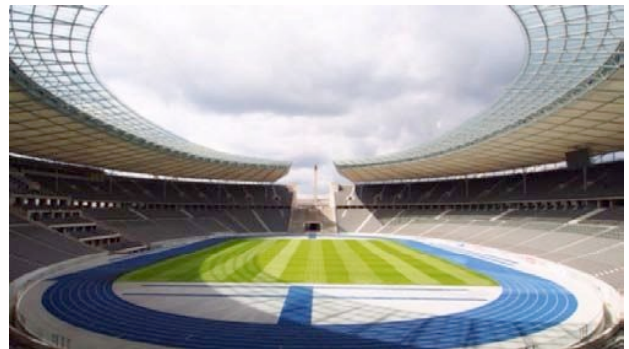
ベルリン郊外にあるこのスタジアムは、その名の通り1936年のベルリン・オリンピックのメインスタジアムとして建設された。スタジアムの正面にまず見えてくるオリンピック五輪を抱く2本の塔。そしてその奥に佇む、古代コロッセオを彷彿とさせる石張りのスタジアム。その姿は古さを全く感じさせず、むしろ圧倒されるような威厳すら感じさせる。このスタジアムは、アドルフ・ヒトラーが建築家アルベルト・シュペーアと1930年代前半に計画した世界首都ゲルマニア（Welthauptstadt Germania）という都市改造構想の一部として、建築家ヴェルナー・マルヒによって設計された。ヒトラーが当時隆盛しつつあったモダニズムを否定し、敢えて古典的な様式を好んだ背景には、ナチスドイツを古代ギリシア・ローマに続く偉大な存在にしようという意思があった。そしてシュペーアによって創案された「ナチス建築は廃墟となった後もギリシア建築・ローマ建築に匹敵する美しい偉大な廃墟となるよう設計されるべき」という廃墟価値の理論に色濃く反映されている。



ベルリン・オリンピックシュタディオン(外観)

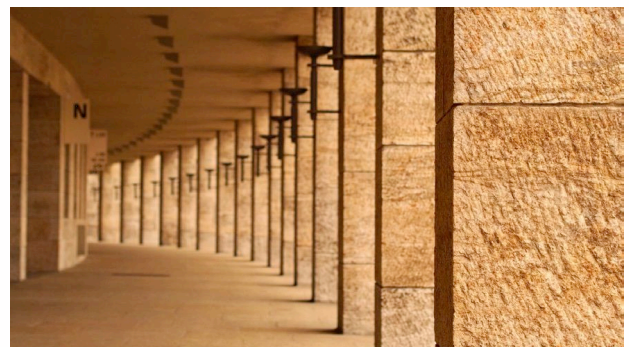
スタジアム内に入ってさらに驚かされた。そこは古典的な外観とは対照に、現代的なガラスの屋根が浮かぶ最新のスタジアムであった。このスタジアムは

1936年に開場し、その後1974年、2004年と2度の改修を経て現在の姿になっている。ブンデスリーガの試合のみならず、1974年のサッカー・ワールドカップ・西ドイツ大会や、2006年のワールドカップ・ドイツ大会、2009年の世界陸上、そしてなでしこジャパンが優勝したことでも記憶に新しい、2011年の女子ワールドカップなどの世界的な大会の会場としても活用されている。収容人数は約7万5000人。その全てを包む、驚くほど軽快な屋根は2006年のワールドカップに合わせて設置された。改修工事の設計はベルリン中央駅と同じく、ドイツの大手設計事務所GMP(Architekten von Gerkan, Marg und Partners)によるものだ。リノベーションで設置された屋根は、スタジアムの真ん中が聖火台として切り欠かれた1936年当初のスタンドの形態と重なるようにデザインされており、まるで元々そこにあったかのように感じさせる。



ベルリン・オリンピックシュタディオン(内観)

それだけではない。このスタジアムには歴史を残し、活かしていくために、数多くの努力が積み重ねられている。例えばマラソンの門と呼ばれるゲート部分に使われている1800個の自然石は現在ではもう手に入らない素材であるが故、ひとつひとつ磨き直して再生されたのだという。ヒトラーやナチスといった「Schandfleck der Geschichte」(「歴史の汚点」の意)とも表現される負の側面をもつ建造物をも、長い時間をかけて素晴らしい建築に育ててきたドイツの人々の力量には感服するばかりである。





新旧の対比が印象的なスタジアム

試合が始まってみると、その熱狂的な大観衆に圧倒された。1試合平均5万4000人とも言われる驚異的な観客動員数は、リーグ戦の1試合とは思えない数だ。しかしこれは、何も人口300万人を超える大都市、ベルリンに限ったことではない。翌日私たちが観戦に行った人口25万人の街、ゲルゼンキルヒェンに本拠地を置く、シャルケ04の平均観客動員数はなんと6万人以上！実に市民の4分の1近くが、隔週毎にスタジアムを埋め尽くしている計算だ。Jリーグで最も人気のチームと言われる浦和レッズの平均観客数が約3万5000人というのだから、その規模の大きさがわかる。サッカーとスタジアムがいかに市民と密着しているかを物語っている。



大観衆が埋め尽くすスタンド

2020年東京オリンピック

そんなサッカー観戦を満喫してしばらくした頃、2020年のオリンピック開催地が東京に決まったというメールが、日本の友人より届いた。慌ててインターネットのニュースを見た私の目に、日本の招致委員の方々のプレゼンテーションが飛び込んできた。開催地が東京に決まり喜ぶ人々の姿。それは私にとって、やけに遠い異国の出来事のように感じられた。そこでは、オリンピックのメインスタジアムになる予定の、新・国立競技場の設計案も披露されていた。2012年9月、世界的なコンペティションで決定されたこのスタジアムは、現在世界中で最も活躍している建築家の一人、ザハ・ハディッド氏のデザインによるものである。そこに映る新しい国立競技場の映像を見て、「なるほど」と私は思った。

彼女の真骨頂は、一目で彼女のデザインとわかるその造形力で、見る者は美醜を超えて思わず目を止めてしまう。新・国立競技場のデザイン選考の際、このオリンピック招致のために、どの案が世界に向けて一番インパクトを与えられるかが重要視されたことは想像に難くない。

国立競技場の解体・建設

現在の国立霞ヶ丘競技場は、1964年に開催された東京オリンピックのメインスタジアムとして使用された。収容人数は約5万人である。2020年のオリンピック招致にあたり、収容人数や屋根付きのスタンドという国際的な基準を満たしていなかった点は、2006年サッカー・ドイツワールドカップを前にしたベルリン・オリンピアシュタディオンと状況は似ている。しかし一方は歴史の遺産を活用し、他方は歴史の中で、誰も見たことも無いようなスタジアムを建設しようとしている。世界的なスポーツの祭典のメインスタジアムになるという同じ目的を持ちながら、全く正反対のアプローチをとっている点は大変興味深い。



現在の国立競技場(*2)

スタジアムの活用という点では、毎試合5万人を超える大観衆が訪れるサッカー・ブンデスリーガの試合は、オフシーズンの2ヶ月を除き、一年中、毎週行われている。8万人規模の新・国立競技場も、それに相応しい規模のイベントが、継続的に行われてこそ本当に価値があると言えるだろう。2013年10月11日、「新国立競技場案を神宮外苑の歴史的文脈の中で考える」というシンポジウムが、世界的に著名な建築家・槇文彦氏の呼びかけで行われ、それでも同様の議論がなされたという。特に長期的なスタジアムの活用を考える上では、現在想定されている解体・建設・その後の維持管理に必要な費用とエネルギーが適切かどうか、慎重に検討されなければならない。新・国立競技場は、17日間のオリンピック後も何十年もそこに生き続けていくのだから。

オリンピックの目的

さらにその後目にしたオリンピック関連のニュース

は「経済効果〇兆円」、「株価上昇期待」という内容のものばかりで、異国の地でそのニュースを見ている私は、違和感をおぼえた。なぜなら、自国の経済効果を期待するニュースばかりが海外に届けば、日本経済のためだけにオリンピックを招致したという印象を与えうからだ。ライフメディア社のアンケート調査でも東京オリンピック招致に賛成する人の理由として、「経済効果が期待できるから」が73%とトップで、続く「日本や東京のイメージが良くなる」の38%を大きく上回っている。オリンピック＝経済効果と、かつては私自身も当然のようにセットで考えていた。しかし、よく考えれば本来の目的はスポーツの祭典であって、経済効果は副産物のはずだ。いつの間にか目的がすり替わり、堂々と一人歩きしてしまっているようだ。

スポーツを通して発信されるメッセージ

私には、スポーツを通して発信されるメッセージの力の強さを再認識させられた経験がある。それは私がドイツに来る前、2011年3月11日のあの震災直後であった。それまで毎週欠かさず見ていたFCバルセロナの試合も、見る気さえ起こらなかった。毎日、被災地と福島原発の事故現場から送られてくる映像を前に、明日が見えず、目の前が真っ暗になるような心境だった。ようやく想像を絶する被害の全貌が明らかになってきた頃、遠くスペインからFCバルセロナの選手が、相手チーム、そしてスタジアムを埋め尽くす何万人という人々と共に、日本に向けてメッセージを送ってくれているというニュースを目にした。いつの日か観戦したいと夢見ていた選手たちが、暗い海に飲み込まれたかのような自分たちに向けて励ましのメッセージを送ってくれている。

「頑張れ、日本！僕らは君と共にいる。」

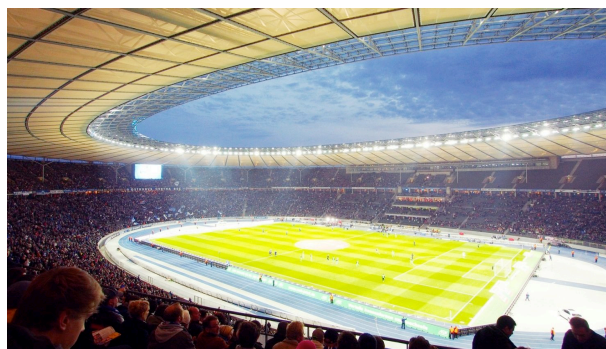
世界は繋がっている。自分たちは取り残されてはいない。スタジアムとは、他に類を見ないほど多くの人が集い、気持ちを一つにして大きな力を生み出すことのできる場所なのだ。私は思わず涙がこぼれて

いる自分に気づいた。やがてその輪は広がり、世界中の至る所から私たちへの励ましのメッセージが送られてきたことを、今でも皆、覚えているはずだ。

2020年に向かって

ドイツで働くようになって始めて知ったが、海外では日本という国は経済的にも精神的にも豊かな国として高く評価されている。だからこそ希望の光が必要だった時に、世界中の人たちが感謝しきれないほど多くのメッセージを届けてくれたのだろう。小さい頃からスポーツに明け暮れて育った私は、一瞬に全てを掛ける選手の姿や、その結果として生まれるドラマは、純粋に人に感動を与えるものだ信じている。そしてオリンピックとはそのための舞台であるのだと。経済がスポーツに大きな影響を与える時代ではあるが、そういった舞台を用意するという姿勢やメッセージを世界に発信してこそ、開催国に相応しいはずだ。

オリンピックのシンボル、「五輪」は五色の輪を重ねた形で、オセアニア、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカの五大大陸を意味している。2020年のその時、未来にも誇れるスタジアムを埋め尽くす大観衆と共に、世界に向けて感謝と希望のメッセージを発信できる大会になって欲しいと、心から願っている。



ドイツ国民の誇りとなっているスタジアム

no.07 おわり

*1 Wikipedia, MR. TI

*2 「街画ガイド」

*その他の写真は全て本人撮影